

この遺跡は、主に古代から中世の集落遺跡です。両遺跡は、町内を南東から北西に向かって流れる笠原川左岸の河岸段丘面に広がっており、字名からその東半を砂田・総作遺跡、西半を権現遺跡と命名しています。ただし両遺跡は本来一帯の遺跡と考えられます。

土地区画整理事業に伴い平成21年1月から始まった発掘調査は、砂田・総作遺跡と権現遺跡は第7次まで行われ、平成27年度に終了しました。

これまでの調査で、両遺跡は縄文時代から人の生活が営まれており、古墳時代終末期(7世紀)には段丘



▲権現遺跡第6次調査 住居跡

より一段高い南側に集落が形成されていることが分かりました。また鎌倉～室町時代になると、笠原川に近い低い段丘面が住居や農地に

活用されるようになります。古い時代の生活の痕跡は主に高い場所、新しい時代の生活の痕跡



は低い場所にあつ ▲権現遺跡第3次調査 須恵器出土状況 といえます。当遺跡からは縄文土器から近代までの陶磁器が出土しましたが、主に古代の土師器・須恵器と中世の山茶碗・古瀬戸などが多く見られます。中世の山茶碗を見ると、東濃型の山茶碗が多い中、土岐川以北ではあまり見られない尾張型の山茶碗が一定量出土しています。これは、笠原が愛知県と接しており、尾張型山茶碗の分布域に近いという、地理的要因によるものと思われる。

企画展「地中に眠る多治見の歴史
～住吉・駅北・笠原の発掘調査報告展～」
は、3月9日(金)から美濃焼ミュージアムで
展示します。(～4月8日(日))

土岐川観察館の自然だより

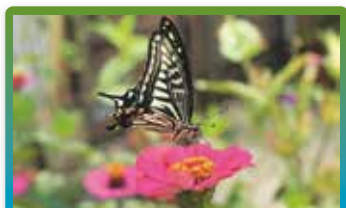
青と緑の物語

☎ 土岐川観察館 TEL 21-2151

チョウが訪ねて来る家

こたつで暖を取りながら「チョウが来てくれる家」を考えているところです。

近所に飛び交うチョウを思い出してみました。図鑑で、そのチョウが好む植物を調べています。蜜や花粉を出す花だけではなく、幼虫の食料となる木も育ててみようと思います。植栽方法としては、たくさんあればチョウは広範囲に飛び回る必要がなくて好まれるようですが、植えられる範囲も広くないので、小さな花が花束のように咲く種類も考えています。この冬食べている柑橘類のタネをまくことにしたの



▲ヒャクニチソウとアゲハチョウ

で、今年中にも産卵があるでしょう。育ててゆく植物とチョウたちの様子が観察できそうです。蜜を求めての競い合い

や譲り合い、求愛や拒絶などの行動が見られそうで、今から楽しみです。

昨年、地植えのヒャクニチソウには、アゲハチョウ類・タテハチョウ類・シロチョウ類・シジミチョウ類が来ました。フジバカマに来たアサギマダラは、南洋を目指したことでしょう。花の後も世話をしているパンジーでは、ツマグロヒョウモンも訪れ、今は蛹になっているので、温かくなるとチョウになり北の地を目指し旅立つのかも知れません。



▲フジバカマとアサギマダラ



▲ツマグロヒョウモンの蛹

(多治見昆虫会 荒木裕之)